

書 評

稲川利光 著

<生きいきケア選書>『老人ケアの元気ぐすり』

山口研一郎 (奈良市あやめ池・やまぐちクリニック)

私が著者・稲川君と初めて会ったのは、1984年8月の「第6回全国地域リハビリテーション研究会」(広島)でのことで、当時彼はPTであった。

脳外科医として臨床6年目を迎えていた私は、障害を持ちながら自宅へ戻る患者さんの生活上の困難を目の当たりにして、医者として何ができるのか……?と暗中模索していた。そんな折、入院中から家屋の改造や福祉サービスの情報を取り入れ、在宅の準備をすすめる稲川君らの発表は、私にとってカルチャーショックとも言えるものであった。本書では、「家屋改造だけではなく外に連れ出すことも考えないと、患者の機能は向上しない」という座長よりの指摘を受け、稲川君は「目からうろこ」の体験をした……と語っているが、彼らの先駆的な実践自体が私には「目からうろこ」であった。

その後、医師をめざした彼は、香川医科大学学生時代の1990年頃、京都・福知山での「ET学会」へ招かれ、「ET」(Entertainment Therapy)なる新語の名付け親として講演を行った。本書にも収録されている「たそがれハイツ」(I部)の個性豊かなおばあさんたちや、「パンの耳—医大生時代の貧乏暮らし」(II部)の話は披露する彼の講演は、終始爆笑の渦に包まれた。

「友人からももらったバイクが故障して、大学までの遠い道程を歩かなくてはならなかったことがあった

んです。いつもただ走り去るだけの畦道に、小さな花が咲いているのを見つけました。私はふと、老人ケアも同じだな、と思いました。忙しい日常の中で気がつかないことでも、時には立ち止まって見つめると、老人のなかにさまざまなものが見えてくるのではないか……」といった講演に、私は彼の感性の豊かさ、こまやかさ、やさしさを十分感じ取ったのだった。本書にはそうした感性がぎっしりと詰め込まれている。

生活の場で本当に役に立つ老人ケアやリハビリテーションは、施設や病院にいるお年寄りや患者さんの姿を見ているだけでは生まれてこない。彼らの家庭での生活を見つめてこそ、多くのヒントが浮かんでくる。そのためには、住み慣れた自宅を訪ね、家の様子を観察しなくてはならない。さらに、彼らの現在の立場や環境を見ても、まだ判らない部分もたくさんある。これまで生きてきた足跡をたどらないと、真の姿は浮かび出てこない。稲川君は、出会ったお年寄りや患者さんの歴史をていねいにたぐり寄せ、さらに彼らと接する自分自身の人生をふり返ることも決して忘れない。本書には、老人ケアやリハビリテーションに関する最も大切な教訓がキラキラと無数の宝石の如く輝いている。

(B5変型 頁200 2,000円+税 医学書院刊)